

《特別寄稿》

田舎の文化

高谷好一*

はじめに

渡部先生に「日本の農村へのくおもい」と題して何か書いてみろといわれました。京都から滋賀に引っこんで4年になる私に、“どうだちゃんとやったりか？”という激励のお言葉だと思いましたので、これに応じて近況報告をさせていただくことにいたしました。私ごとを述べることになって、はなはだ恐縮なのですが、こんなことですのでお許しいただけると幸いです。

1 農村はやっぱりあります

京都にいる時にも、“農村はある、特に日本に農村はある”などといって、この雑誌にも日本の農村をタイやインドの農村と比較して書きました（創刊号『水田の景観学的分類試案』）。しかし、今考えてみますと、あれはずいぶん荒っぽいものでした。望遠鏡で見ていたような所がありました。やっぱり、京都に居て書いたからでしょう。それで、今度は自分の生まれた滋賀の琵琶湖畔に帰ったのを幸い、もう少し近くから見た農村を報告したいと存じます。やっぱり農村はあるようなのです。

*たかや よしかず、滋賀県立大学人間文化学部

a) 屋敷地

ごく最近のことです。母が、「ウラを高校生らしい二人が通って行ったの。恐ろしい世の中になった」といいました。他人の屋敷地を通り抜けて行くなんて想像を絶する出来事だ、ひどい世の中になったというのです。そういわれてみると私達は自分の家に関しては相当強い縄張り意識を持っているのです。家だけではありません。字に関しても同じです。他人には犯されてはならない神聖な場所とさえ考えているようなのです。長く町住みをしていた私にはこの感覚は大分薄れていたのですが、田舎に居続けた母はまだ強く持っていて、この高校生のことは相当なショックだったようなのです。

私の家と字の様子を紹介させて下さい。屋敷は600坪の長方形で、その四周が生垣で囲われています。前の半分は畑になっていますが、後ろの半分は植込みです。家自体はその植込みの中にあります。両隣もほぼ似たような屋敷になっています。敷地のサイズには多少の大小があるのですが、私の字にはほぼこんな作りの家が100戸ほどあります。別に氏神社が1つ、寺が5つあって、それらを含めて一つの塊村を作っています。そして、広い水田に囲まれています。典型的な水稲農村なのです。

家の中ですが、私の家では台所に神棚があります。そこには氏神社から貰ってきたお札がおいてあります。次の間が居間で、その次が仏間です。そこには御先祖の位牌や過去帳も置いてあります。命日などには字にある願い寺から坊さんがやっ来てお勤めをして下さいます。植込みの中にはお地蔵さんがあります。このお地蔵さんは修行中の身で、激し易い方だと聞かされています。それで怒らせないように特別の注意を払っています。不思議なことですが、このお地蔵さんの横には時に白蛇が出ます。これは私達高谷一統の守り神ということになっていまして、その白蛇の小さい社を、5 kmほど離れた兵主大社においてもらっています。別に植込みの東北角は鬼門ということになっています。私が刈込んだ枝などをそこへ積み上げたりしておく、鬼門にそういうことをしてはいけないということで母はそれを取り除きます。外からは見えないかも知れませんが、家と屋敷にはこういうものがあるのです。そこは意味空間になっ

ているとってよいのかも知れません。

もう少し続けさせていただきます。両隣との間には生垣に小さい潜り戸が設けてあります。だが私はこの潜り戸を利用したことがありません。隣家を訪れる時には私はいつも畑を越えて一旦自分の屋敷の外に出、そして隣家の正面入口から入って行きます。これはだいたい遠回りなのですがいつもそうしています。癖だからそうしているのですが、何故そうしているのかとあらためて考えてみると二つのことが考えられます。第一は、そうしなければ隣人に迷惑だ、といった感じがあるからです。正面から入って来るのが見えるようにしてあげるのが礼儀だ。そうすると相手は訪問者を迎え入れる準備が出来る。はっきりと意識しているわけではないのですが、何となく私はそんなことをいつも考えているようなのです。第二の理由はもう少しシンプルです。いやしくも一家の主人たる者、潜り戸から出て行ったりすべきでない、という感覚です。

もちろん潜り戸はよく使われています。隣のオバサンはそこを通過して回覧板や大根や豆を持ってきてくれます。私自身も潜り戸の先に人が見えると声を掛け、ちょっとした話をすることもあります。だが、ここは私にとっては通路ではないのです。

町住みの人には分からないかも知れませんが、屋敷にはこういう約束事があるのです。部分部分はそれぞれの意味を持ち、それらはちゃんとした秩序のもとに配置されているのです。しかも、その機能たるやそこに住む人の立場に応じて少しずつ違っているのです。早い話が、潜り戸は隣のオバサンや母、それと私との間ではすでに意味が違うのです。ましてや両家の人間と、両家にとっては第三者の他人様にとってとは全く違うのです。当たり前といえば当たり前のことですが、それが相当厳格に守られているのが田舎です。そういうことですから見知らぬ高校生が自分の家のウラに現れたりするとひどくびっくりして、母は「恐ろしい世の中になってきた」というのです。

町だどこういう経験をするのは少ないようです。団地住まいなどすると全くないのではないのでしょうか。私は昔、宇治で5階建ての公務員宿舎に住んでいましたが、そこではそんなことは全くありませんでした。階段が狭かったも

のですからすれ違うときにはいつも相手の体が触れんばかりでした。そんな具合なのに、出会う顔は自分の知らない顔が多くありました。そこではプライバシーといえは鉄の扉で遮蔽された50平方メートルたらずの自分の部屋だけでした。しかも、その部屋も完全なものではありませんでした。安普請でしたから隣の物音が時に聞こえてきました。上で子供が走りまわって仕事が出来ないといつて、怒鳴り込みに行つて仲違いした友人もありました。

その後私は一戸建てに移りました。それは生垣に囲われていて、一応は自分の敷地というのがあったのですが、やっぱり今の田舎のそれとは違ったものでした。第一、意味づけのある空間などというものは全くありませんでした。それに仮に見知らぬ高校生が通過したとしても多分それほど強いショックを受けなかったと思います。どうせ近所には知らない人が一杯いるのだから、そんなことぐらいあるだろうという、ある種の「常識」があったからです。多分、「コラ！」とぐらい言ったかも知れません。でも、相手を大変刺激するような言動はしなかったと思います。そんなことをしたら何が起るかも知れない、という「常識」も持っていたからです。私が住んでいたその宇治の屋敷は、だから、いつてみれば本当の意味での「自分のもの」ではなかったのです。そこは団地ほどではなかったかも知れませんが、いつも半分他人の侵犯を許さざるをえない、そのような「自分のもの」でしかなかったのです。

こうしてみると、田舎には確かに本当の意味での空間というのがあるように思えます。それはまず、意味空間としてのものです。特別な意味を持った場所があちこちに配置されています。それから今頃の世の中では大変贅沢なことですが、完全に自分のものに出来る場があります。あんな高校生の侵犯は全く例外的なことで、普段ならここは誰も入ってこない聖域なのです。この聖域のおかげで母は大変、重心の下にある落ちついた生活を送っています。それは町の人と比べると極めて大きな違いです。町の「常識」を持ち続けて生きて行くためには正直いって、相当無理をしなければなりません。いつも重心が丹田の上に浮いてしまっているような、不安定な状況を続けていかねばなりません。

何よりもまず最初に、この屋敷地の存在のことを報告いたします。

b) 田舎の文化

こういう田舎は屋敷地だけでなく、そこに育った田舎文化とでも呼ぶべきものを持っています。例えば次のようなものを拾いあげることができます。精魂こめた労働、生活の「型」、共同体を支える「知恵」、感謝の「こころ」などです。

再び母のことを取りあげることになりますが、母はほとんど毎日畑の作物の世話をし、植込みの間の草ひきをしています。それを精魂こめてするのです。目一杯精魂こめて働くからでしょうか、夜は全く満足しきった顔をしています。今は機械化されてそうでもなくなったのですが昔は、字のほとんどの人達が田仕事や畑仕事に本当に精魂こめて働き続けました。それはそうせざるをえなくてそうやっていたのですが、そうやって力一杯働くことによってその後でほんと満足感に浸ることができました。私は、これはひとつの文化であると考えています。小人閑居して不善をなす、の逆です。

生活の「型」と言うことがまた大変立派な文化だと思います。朝夕の挨拶から始まって紋日のあらたまった立ち居振る舞い。田舎の人の挨拶や立ち居振る舞いは町のそれに比べると問題にならないくらいビシッと決まっています。私など町から帰ってきていかに自分がこの「型」を知らなかったかということ思い切り知らされました。それから冠婚葬祭時のお見舞いや贈答。これは虚礼などといって非難する向きもあるのですが、そうとばかりはいえません。こうしたお見舞いや贈答のおかげで人々は常日頃から密接な連絡を保って、いざというときの扶助などが極めてスムーズかつ実質的に行われるようになっているのです。

「型」が決まっているということは実にありがたいことです。迷った時もその「型」にしたがって行動しておればよいからです。今日の都会でのようにどんな生き方をしてもよい、その選択は個人に委されるとなると、かえってとまどってしまいます。あげくの果てにとんでもない非常識なことをしでかすこともあります。それに長年生きてきた「型」は普通美しいものです。日々の生活に現れる「型」というものもあるのですが、それと同時に人々は人生を全

うする「型」というのを強く意識しているようにも私には思えます。たぶん御先祖達がそれを見守っておられるからでしょう。

共同体の「知恵」ということもあります。今年の正月、字の自治会の総会でこんなことがありました。会長が提案をし、「賛成の方は挙手願います」と言いました。約100名の出席者のうちの3分の1弱が手を挙げました。「ありがとうございました。多数でもって可決されました。」会長がいました。すると参会者の中から声がありました。「会長さん、今何票ありました?」「ここから見たら多数に見えたのですけどナ。ホナ、皆さんもう一度、決とらしてもらいます。賛成の方、挙手願います。」今度は3分の2以上の手がサッと挙がりました。「よろしおすか。多数ですな。ホナ、この件は可決されました。」

この話は町の人達の目には全くの茶番劇に見えるのかも知れませんが、それがそうではないのです。ここには字の人達の持っている「知恵」が見事に現れているのです。参会者達の多くは会長の最初の態度で、何が字にとって、ひいては自分自身にとっても得策なのかを、瞬時にして感知したのです。そして賛成に転じたのです。詳しく説明はできませんが、私はこれを見て、これがあるから字はまだ大丈夫なのだ、と実感いたしました。

似たような例をもう一つ挙げさせてもらいましょう。私達の願い寺の本堂の屋根葺きが必要ということになりました。見積もりを取ると3000万円ということになりました。檀家は30戸ですから1戸あたり100万円を拠出することが必要ということになりました。総代がこのことを議題に出すと、かなりの人から消極的な発言がありました。はっきりとした反対意見もありました。しかし、数回の会合の後、結局は全員賛成ということで工事は進められることになりました。このケースは先の自治会の場合よりも深刻です。何せ1戸あたり100万円ずつを出さなければならないからです。しかし、今もいったように結果的には全員賛成のもとに工事が進められることになったのです。これはちょっとしたことだといわねばならないのではないのでしょうか。確かに相互規制だの世間体だのということがあって全員一致ということになったのです。だが同時に人々が皆、自分の両親のこと、子供や孫達のこと、それから現に年に何回も自

分達が報恩講を行っていること、そしてそれは本当にいいものであること等々を考えあわせて賛成という結論を出したことも本当なのです。こういうことのできる人達を私は「知恵」を持った人達と考えるのです。

最後に人々が持っている感謝の「こころ」というものも取りあげておきたいと思います。今述べました寺の屋根の葺きかえが可能になったのはこの「こころ」があったからだと思います。現にこの時も何人かの老人達は「ありがたいことや。お寺の屋根をきれいにさしてもらえる」といいました。それ以外にも人々は何かという、「おかげさまで、ありがたいことや」といいます。私の母などは、これをまるで枕詞のように頻繁に使います。天気だと、「あ、ありがたい、今日もおかげさまでいいお天気や」といいます。雨だとまた「あ、ありがたい、久し振りのお湿りや」といいます。そして、その後で必ず「なまんだぶつ、なまんだぶつ」とつけ加えるのです。こんな調子で「ありがたい」と「もったいない」は日に何十回も口にします。「なまんだぶつ」は何百回もしているのではないのでしょうか。

もっとも、「ありがたい」や「もったいない」や「なまんだぶつ」は正統的な仏教教義のそれから出てきているのかどうかそのあたりは少し怪しいものがあります。一度こんなことがありました。母は御仏飯をいただくのですが、おらずに肉や魚が混ざっていると「もったいない」といって絶対に食べません。そのことを知人のお坊さんに話すと、仏教ではそんなふうには教えていないというのです。それで私は早速そのことを母に教えました。すると、「そんなことをいっても、もったいないやないの。お坊さんの教えはどうか知らんけど、もったいのうて、そんなことようせんワ」というわけです。いまだに魚のあるときは御仏飯は遠慮しています。

そんな母を見ていると母の「なまんだぶつ」は決して狭い意味での仏教徒のそれではないようにも思えます。仏教をも包みこんだ、何かもっと大きなもののような気さえするのです。この土地に住まわせてもらっていること、そのことに満足し感激しているように見えて仕方がないのです。太陽にも雨にも土にも、作物にも、隣人にも、そしてもちろん阿弥陀さんにも感謝している。そん

な「こころ」を持った人が、母だけではなく、かなりの数ここにはいるように見えて仕方がないのです。

こういう「型」「知恵」「こころ」の総和は私には立派な文化に見えるのです。それは決してきらびやかなものではありません。例えば京都にある華道や茶道のような見映えはありません。また東京や大阪、それに今ではどこの町々にも氾濫している、アメリカ風の文化とも違います。ちゃんと見ないと見落としてしまうような地味な文化です。でも、どっしりと大地に根を張っている。そんな文化がここにはあることを、私は皆様を知っていただきたいのです。

c) 裸にされた字

こうした集落はすでに述べたように広い水田の中に散在しているのです。私の字の場合だとより正確にいうと三方には水田が広がっており、一方は野洲川の堤防になっています。

野洲川の堤防のことを少し書いておきましょう。そこには竹と松が生えています。堤防の下には伏流水の湧き出る泉があって、それが字の飲料水の水源になっていました。そこから地下に埋めた竹パイプで水を各戸に引いてきていたのです。野洲川そのものは秋の台風時にはしばしば巨大な洪水を流し、時に決壊したので恐ろしい川でした。でも普段は子供達の遊びの場であり、小魚をとる場であり、堤防の松林は燃料用に落葉を掻き集める所でもありました。水源にしていたきれいな泉がありましたから、ちょっとした聖なる場所でもあったわけです。この野洲川があったお陰で私の字は一段と内容的には膨らみのある、また個性的な字でもありました。

ついでに付け加えますと私の字からは比叡山と比良山の二つが大きく、はっきりと見えました。それらが霊山であるということを知っている私達は、字がそんな位置にあることに大きな幸福感も持っていました。考えてみると、私などは字の位置を野洲川とこの二つの霊山を座標軸にして感覚的に捉えていたようです。こういう格好で私の字は広い水田地帯の中にちゃんとその位置をえて存在していたのです。そして、他の何百という字も同じような状態で存在して

いたのです。

ところで、「していた」といっているのはそういう状況が過去数十年のうちにかなり変わってしまったからです。「裸にされた字」といっているのはそのことです。そのことを少し述べてみましょう。私の字の場合だと野洲川の付け替え工事が行われて、堤防も池もどこかへ行ってしまいました。これは実に実に大きな変化なのですが、そのことはここでは詳しく述べないことにしましょう。私の字だけの特殊事情だからです。それよりもここでは水田地帯全体にかかわるもっと全般的な変化を述べてみましょう。それは、水田自体が本当にすっかり変わってしまったのです。そのことを少し述べさせてもらいます。

以前は田面にはもっと凹凸があり、畦も曲がりくねり、立木なども少しはありました。それが今では真っ平らになり、直線の畦ばかりになり、まるで飛行場ようになってしまったのです。昔を知っている者からすれば何とも殺風景な眺めです。これは基盤整備の結果ですが、この景観の変化自体がまず第一の大きな変化です。だが実は私は個人的にそれ以上にもっと大きな変化を実感しています。それは自分が水田から締め出されてしまったと感じているということです。私と同じように感じている人は、おそらく何人もいるだろうと思います。

昔はあんなに気軽に近づけた水田でしたが今はもう近づけないのです。第一、危険に満ちみちていそうで近づく気にならないのです。それに、仮に勇を鼓して近づこうとしてもなかなかそれが出来ないような社会的仕組みになってしまったということです。

私は水田に取り囲まれて生活していますからいつも稲を見ます。今（7月）だと若稲の時季です。稲株は隆々と生え揃っています。だが、何だか異様なのです。株を揺すってみても一匹の蛾やウンカも飛び立ちません。水の中にも一匹の水棲昆虫らしいものもおりません。一本の雑草もありません。まるで無菌室の中で育てられている稲なのです。無菌だけれど、たぶん相当強烈な薬が使われていて、人間には有害なのでしょう。だから、いつ見ても、水田には人影ひとつないのでしょう。

昔は様子はずいぶん違いました。苗代時季には学校の指示で小学生が皆田に出てウンカ取りをしました。苗代を竹竿で掃くようになで、葉の裏についた卵を取ったのでした。隣の田では大人達が、泥だらけになって代掻きをしていました。それはそれは賑やかで、しばしば皆で、畦でオヤツを食べたりしたものです。そんな姿は今もうすっかり消えました。

今の田作業だと次のような具合です。いつもは人っ子一人いない田に4月になると、ある日突然数台のトラクターが現れて、アッという間に田起こしをしまいます。それはたいてい土曜日と日曜日です。そして、しばらくたった土曜日から日曜日に、今度は十数台の田植機が動きまわって、アッという間に田植えをしまいます。また何日かすると、今度はあちこちの水田が白い噴煙で覆われます。消毒と害虫駆除の薬を撒いているのです。撒布している人は防毒マスクをつけ、体全体を嚴重に覆っています。そんなときはあたり全体が刺激臭を漂わせます。5、6年前までは飛行機による空中撒布をやっていました。そんなときには有線放送で知らされると、皆雨戸を閉めて農薬が入ってこないようにしたものです。今はそれはなくなりましたが、まだ、強烈な農薬が広範に使われていることは同じです。そうでなければ、人っ子一人いない田に虫も草もないというようなことは考えられないのです。こういう水田を日頃見続けているから、水田とは恐ろしい所、といった感じがすぐに頭に浮かんで来るのです。

私は恐怖感と同時に疎外感も持っています。それはこういうことです。仮に私が自分でも稲作をしたいと欲しても現実にはそれは出来ないような状況なのです。実は、私はほんの10アールなのですが水田を持っています。それを耕したいという気はない訳ではないのです。だが状況を考えるとそんなことは不可能なのです。ああして巨大なトラクターと田植機がアッという間に耕起と植付けを完了してしまう時に、私一人がどうして鋤で耕し、手で植付けていけるのでしょうか。まわりの田全面に強力な毒薬が撒かれるとき、どうして手で除草したらよいのでしょうか。それをやろうとすれば私は防毒マスクをつけ、腕まで覆うゴム手袋をつけてその作業をやらねばならないでしょう。結局、

私は今では水田作業からは締め出されているのです。

字をとりまく水田はこうしてすっかり変わってしまいました。はっきりいって、人の居ない場、人の近づけない場になってしまいました。飛行場のようにきれいにされた所に、大きな機械が走り、化学肥料と農薬が大量に投じられるだけのものになったのです。字宇宙の側からすれば、これは相当に大きな打撃です。だって、そこを主舞台にして、私達は「精魂込める時間」を持っていたのです。それを基盤にして満足感を得ていたのです。それに、そこを介して、私達は隣の字ともまた、その隣の字とも血のつながりのようなものを感じていました。さらには、霊山とのつながりさえ感じていたのです。それが、今ではその広がりハマるまで死の砂漠のようにさせられ、字々は皆バラバラにさせられてしまったのです。

2 水田はどうなる

水田というのは字の住人の目から見ると、上に見てきたような具合なのです。これはこの先どうなるのでしょうか。現在の水稲耕作の様子は決して望ましいものではありません。私はもっぱら田舎文化を守るという視点から論じてきたのですが、現行の稲作は経済という点からも大変な難問だとして論じられております。現状では経営が成り立たないからです。こんな状況の中で、水田は将来どのようになっていくのでしょうか。私の希望的観測も含めてこの点を少し考えてみたいと思います。

a) 現れ出した二つの芽

私にはすでに二つの芽が現れ出しているように見えます。その一つはいわゆる大規模経営です。今ひとつはユートピア農業とでも呼ぶべきものです。その二つを見てみたいと思います。

イ) 大規模経営

滋賀県下でも何人かの人達が20ヘクタール前後を耕作しています。これだと

経営的には成り立つようです。数十アールなどという小面積だと機械への投資が割高になって、やって行けません。でも、10ヘクタール以上をやると成り立つようなのです。もちろん、自分の持ち田だけではこれだけの面積は集められませんから借地をしたり、委託耕作を加えたりしているのです。

こうした大規模営農をしている人達は、いろいろのことを大変よく考え、鋭意努力しておられるから、たぶん将来もうまく行くのでしょう。合理化のためにいろいろのことを考えておられます。例えば限られた家族労働で経営面積を伸ばすための省力化の方法を徹底的に研究しておられます。もちろん省力化といっても反当収量もあまり落としてはなりません。その辺りの絡みを睨み合わせて、苗代への粃の播種密度や、移植時期、それに移植間隔、施肥の回数や時期などを熱心に研究しておられます。

また、こうした先進的な稲作の追求者の多くは環境にも気を配っておられます。肥料や農薬の多用が湖水などの汚染の原因の一つであることを知っておられますから、いわゆる低投入稲作の道を模索しておられます。

こうした人達は稲作農学者達とも同じ方向を向いておられるようです。この意味では現場と研究部門は協力して、日本の稲作を少しでも合理化しようと努力しておられるのです。大規模経営者のこういう動きを見て、私はこれは育てていく一つの芽じゃないかと思っています。

ロ) ユートピア農業

ユートピア農業というのは少し奇妙な表現ですが、この言葉で私が考えているのは、例えば、ヤマギシ会の農業のようなものです。この種の農業をやる人達はただ単なる営農というよりもユートピア建設とでもいったことをやっている人達なのです。この種のもは現状ではそれほど広く行き渡っているものではないのですが日本の将来のことを考えると大変重要なものではないかと思うので、ここで一つの芽としたのです。

仮にヤマギシズムを取りあげてみますと、その考え方は次のようなものようです。人間は自然の中で生きるのが一番だと考えているようです。森あり、川あり、きれいな空気のある自然の中で楽しく住んでこそ本当の生き方だと考

えるようです。だから、老いも若きも皆で力をあわせてそういうところで楽しく農業をやって行こうではないかということのようです。農業は何も専業の農民だけがやるべきものではない。素人でもちゃんとやっていける。だから誰でもよい。考え方に賛同する人があれば皆で楽しく、自然の中で農業をやるのではないかというもののようです。ただ、実際にはそういう農業は個人ではできないからみんなで集まり、集団で行おうというものなのです。

またこんなふうにもいっているようです。自然は決してバラバラではない。動物も植物もお互いにつながっている。植物を食って動物が育ち、その動物の排泄物が養分になって植物が育つ。そういう循環の中に人間も入っている。だから人間も含めた循環の農業を考えねばならない、というのだそうです。ということだから、ヤマギシ会は最初から養鶏と畑作を組み合わせたそうです。後には養豚、養牛と広げ、それと稲作、果樹作とも組み合わせていったようです。トラクターなどの機械は大々的に使用していますが化学肥料のようなものは用いないようです。それと取量を無理に上げようなどということも考えないようです。ゆったりと動物や作物を育て、その動物や植物の育ち方を見て人間もまたそのように自然に生きていこうとしているということのようです。

b) 欲しい第三の方向

上に見た二つの方向は今後ともそれなりに伸びていくのではないのでしょうか。またそうあって欲しいと思うのです。しかし、私は個人的にいうと、そのどちらにも入れないのです。すでに述べましたように農業は自分でもやってみたいと思いますし、現に農地もあるのですが、そのどちらにも私は入れないのです。こういう者からすると、何とかして第三の道が開けないものだろうかと思うのです。

何故、上の二つの方法は私にはそぐわないのかといいますと、次のようなことがあるからです。まず大規模経営ですがこれはちょっと気分が乗らないのです。第一、私は10アールしか持っていませんからあと何百アールも集めねばなりません。それに機械や設備も揃えなければなりません。こうして食って行く

ために農業をするのなら、他の職業の方がよいなという気がするのです。

一方のユートピア農業の方ですが、これもなかなか大変です。例えばヤマギシ会だとすると、残念ながら私は総論賛成各論反対という所になってしまうのです。この会の場合だと、入会に際して、全財産を提出しなければならないようです。そのうえで、普通の会員として集団農場で生活していくのです。財産を提供しても、勿論配当などというものは期待できないのだそうです。そのやり方は大変素晴らしいことだと思うのですが、私はそこまでは徹しきれないのです。

それにもう一つという私は自分の故郷を離れるのが嫌なのです。何か南米かどこかの入植地に行ってしまうような気がして淋しく感じて嫌なのです。先に述べましたように私には神棚や仏壇、お地蔵さんがあります。それから隣の人や字の人達があります。さらにはあの角度に比叡山や比良山が見えるということもあります。ヤマギシズムの考え方、生き方には非の打ち所はないのですが、いざ集団生活をするのだとすると、それらの全てをも捨て去らねばならないのではないのでしょうか。それは私には出来ないのです。だから、この素晴らしいユートピアにも私自身はよく飛び込めないのです。

私の周辺には、私のような人が案外多くいるのです。大規模経営で食って行く気はないし、さりとてユートピアの建設に参画する徹底さもない。だからといって現状に満足しているわけではさらさらない。

毒薬漬けになった今の稲作には強い疎外感を持っている。そういう人達の多くは数十アールの水田を持った兼業農家や、私のようなほんの少しの農地を持つ人間なのです。またこういう人達の多くは先に述べたような字宇宙の一員なのです。こんな字宇宙の一員として先祖伝来の水田を手放すというようなことは到底考えられないと思っている人達なのです。

こういう人達は水田耕作は儲かるうが儲かるまいが、とにかく田を手許においておくために耕作を続けているのです。だが、その耕作は現状ではすでに見ましたように機械化と肥料、農薬の多投攻勢の中で、極端に歪められているのです。農薬の危険がある上に、やればやるほど赤字という状況にさえあるので

す。このあたりの所が何とかなるような第三の道が現れないだろうかというのが田舎にいる私などのいつわらざる気持ちなのです。

将来のことを考えてみましょう。日本の稲作はそのうち三つの型の並存になるのではないのでしょうか。一つは大規模経営です。第二はユートピア農業、そして最後にここにいう第三のものが現れるのです。第三のものの特徴は何なのでしょう。もし、それをあげるとしたら土地の伝統の中で生きていく農業、ということになるのでしょうか。大規模営農のように経済合理性を追求するわけではありません。かといってユートピア農業のように独自の思想を貫くというものでもありません。むしろ、在来の土地の生き方をなるべく無理なく延長していくという農業です。

第三の道の大きな方向はすでに決まっていますが、それが具体的にはどんなものであるべきかということになると、それが今の所はよく分からないというのです。ただ、私などが思うことはいくつかあります。まず第一は売って儲けることは考えなくて良いではないかということです。基本的には自給のためのものでよいではないかということです。それから、作物としては稲でないほうが良いのじゃないかということです。稲作というのは適期というのが狭すぎて農作業が硬直しています。だから兼業者や怠け者にはなかなかやり難いのです。その点、畑作は弾力的です。畑作と組み合わせることによって、随分ゆとりが出来、楽しく作業が出来るのではないかと思うのです。あるいは、もう一步前進して動物飼育や遊びの場と組み合わせることさえ考えられるかも知れません。滋賀県下でも、すでにそういう試みをしている所はあるようです。遊びの場とっていますが、別に立派な施設を作ることではありません。レンゲ畑があって時に字の子供達がそこで遊びやお祭をやったり、農地を持たない町の人達も加わって、ちょっとした野菜や花、果物を作ったり、そんなことを考えているのです。あるいは、ひょっとしたらユートピア農業の人達との連繋があっても良いかも知れません。彼等はすでにこういった複合農業については相当の知識と技術を持っているようですから、字の人達は彼等からいくつかのことを学べるかも知れません。

今私が第三の道について言えることは、たったこれだけのことです。あまりにも具体策を欠く話で思いつき程度なのですが、その向かおうとする方向だけはこれ以外にはないのではないかと考えているのです。

あ と が き

近頃は、オームの事件や神戸の中学生の事件のような恐ろしい出来事が頻発しております。これらの恐ろしい出来事は社会自体が病んでいるから起こっているのに違いありません。急激すぎる近代化や都市化の中で、人々は皆、自分自身の落ち着ける場を無くし、重心を丹田の上に飛び上がらせ、衝動のみで生きるようになったからではないでしょうか。

私自身は30年ほど町で住んだ後、田舎に帰ったわけですが、帰ってみて初めて田舎にはまだ人の落ち着ける場があることを発見いたしました。同時にそこで人々の生きる「型」や「知恵」や「こころ」を見出しました。田舎の文化を発見したといっても良いかも知れません。

病める日本社会がこのまま崩れてしまうかも知れない危惧さえ持たざるをえない昨今、田舎の文化はそれを支え直してくれるひとつの柱になるのではないかという気もして、この一文を書かせてもらった次第です。

参 考 文 献

高谷 好一

1978 「水田の景観学的分類試案」『農耕の技術』1号。

橋川 潮

1996 『二十一世紀への提言、低投入稲作は可能』富民協会。

ヤマギシズム生活実顕地本庁文化科（編）

1987 『人間と自然が一体のヤマギシズム農法』農文協。

